

.....

## ほごつりの話

.....



今、土居田分館がある辺りに、中の小路（なかのしょうじ）という道があったそうなの。

中の小路は、道の両側が竹やぶだったそうなの。だからお日さんがあがってくるのに、昼でも日が当たらず、暗ーい暗ーい所だったんじゃないの。

だから、夜となると、この辺りは真っ暗闇だったそうなの。夜、この道を村人が通りかかると、暗闇から、だれかに見られとるような気がして、こわーいこわーい気持ちになったんよ。

ある日のこと、この道を太郎兵衛さんが歩いて家に帰りよった。

「きょうは。すっかりおそうなってしもうたわい。」

そう思いながら歩いていると、どこからともなく、すうっときれいなほごが下りてきた。ほごというのは、わらで編んだ入れ物で、昔はどこの家にも必ずあってな、お米や野菜をこれに入れて運んどうったんじゃないの。



太郎兵衛さんは、それを見たとき、なぜか知らんけど、乗りたくて乗りたくてたまらんようになってな。おそるおそる乗って見たんじゃないの。するとどうしたことじゃ。心の中がぱあっと明るくなって、まるで花が咲いたような、幸せな幸せな気持ちになったんじゃないの。



そのうち、すうっと引き上げられてな。助けをよばにゃいけん、よばにゃいけんと思うても、声がどうしても出んかった。ああ大変だ大変だと、思っているとな。東の空が少し明るくなつてな、にわとりがコケコッコ、コケコッコと鳴き始めたんじゃないの。

すると、ふしぎなことにな、ほごがすうっと道の上を下りた。一瞬のうちにほごは消えて、太郎兵衛さんは、道の上にぽつうんと座っているだけじゃった。

なんぼ考えても考えても、さっぱりわけがわからんかった。ひよっとしたら、タヌキかキツネに化かされたのかもしれないな。